

Special Essay

2007年度米国臨床腫瘍学会だより

久留米大学先端癌治療研究センター

山中 龍也

本年度の米国臨床腫瘍学会（ASCO）は、我が国にとって記念すべき年であった。進行胃癌に対する化学療法の成績が日本臨床腫瘍研究グループから報告された。ACTS-GC trialにおいて、Stage II, IIIの進行胃癌に対するD2廓清を伴う定型手術単独と、手術後のadjuvantとしてS-1を用いた比較試験で、S-1を用いた術後化学療法の有意性が証明された。また、切除不能ないし再発胃癌に対する比較試験ではS-1がbest single agentであることが確認された。更に、現在進行中のFLAGSと呼ばれるInternational trialでS-1の優越性が証明されれば、S-1は国際的な標準治療薬となることが期待される。この開発の基盤には、消化器外科の国際的にもレベルの高い手術学の確立があった事も見落とせない。我が国で開発されたOxaliplatin, Irinotecan, Pirarubicinなどと共に、S-1も抗癌剤のmajor playerの仲間入りをする事と考えられる。

従来、日本の新薬開発は、独自のルールで臨床試験を施行してきた結果、欧米に大きく遅れることとなった。国際的には、肝癌のsorafenib、白血病のdasatinib、骨髄腫のlenalidomide, bortezomib、前立腺癌のsatraplatinなど新規抗癌剤、分子標的薬の第Ⅲ相試験の結果があいついで報告され、これらの疾患での標準治療が変化しつつある。しかし、状況はかなり変化しており、規制当局、製薬会社がこの流れに対応すべく、Global developmentに向けた体制の整備がなされつつある。癌治療のグローバルスタンダード化が進むなかで、日本臨床腫瘍学会が取り組んでいる、臨床腫瘍医、臨床腫瘍研究者の教育・育成が、我が国の臨床腫瘍学全体のレベル向上に寄与し、多くの日本発の治療法、治療薬が開発されていくものと期待される。

